



一見、普通の…

## 東

林寺「いきいき寄席」の前日と当日テレビの取材を受けた。最初、人伝に連絡を受けたときは、「風変わりな学習塾の取材をしている」という話だった。別に奇をてらっているわけではないので、大きなお世話だ、と思っただけで、無料で宣伝してくれるようなものだからありがたく受けることにした。高尾小学校でも何度もテレビの取材があつて、子どもたちがインタビューに答えるうちに、だんだんと力みが抜けてすらすらと受け答えるようになっていくのを見ている。これも場数なので、子どもたちにとってもいいことなんだと思う。

子どもたちが来る前に教室を外から撮らせてくれたと言つて、カメラマンとディレクターが外に出て、何やらしゃべりながらカメラを回している。放映されたのを後で見たら、「この一見普通の民家が」とナレーションが入っていて、それに合わせて実家が映つていた。変哲なんぞあるものか。たいていのことは、普通のところで起こっているじゃないか、と笑つてしまつた。風変わりを強調せんがために、昭和の佇まいをだしにされて、両親もあの世で苦笑いしていることだろう。

この実家、六月には骨組みだけ残して作り替えることになつていたので、偶然ながら最後の姿を映像に残

すことになつた。ちょうどいいやと長く会っていない群馬の兄に映像ファイルを送つたら、なつかしがつて、台所はどこになるのだ、あの便所はどうする、などあれこれ尋ねてきた。説明するいい機会になつた。顔の前にテレビカメラを据えられ、あれこれ聞かれた。「どういう目的で始められたんですか?」「子どもたちにどんなふうになつてほしいですか?」「ほかにもたくさん。「そんなことわかりません」「あんまり考えたことありませんでした、ごめんなさい」と答えるべきなのに、どこかで正直な回答を自ら封じてしまつていて、ペラペラとしゃべつてしまう。まあいつものことではあるのだが。

先の問いに、ぼくはとつさに「自分のことをしゃべるのが大好きになつてもらいたいですね」と答え、後からそれがとても気になつてしまつた。今までそんなふう考えたことなどなかったからだ。これまでずっと考えてきたことと、言つてしまつた言葉と関係があるのかないのか。口をついて出た言葉は、ぼくの考えに従順だったのか、それとも裏切つたのか、よくわからなくなつてしまつた。

幸い、それはカットされていたのだけど、やっぱり今も気になつたまままだ。そして、案外悪くないかもという気がしてきている。

北海道への旅、三度目  
木幡智恵美

3

日程だけは九月中旬から下旬と決め、娘にはその間は子守に行けない旨を伝えた。今年の暑さは格別で、一日を無事過ごすだけで精一杯。そんな私に、夫は「下道ですつと行つてみるか」「青函連絡船が結構高くて。大間からは安いけど、そこまでが遠くて」などと、インターネット検索をしてはあれこれ話しかけてくる。私の頭の中の北海道地図はまだ真つ白だ。それでも、「下道は大変だよ。行くだけで疲れて北海道回れんよ」と答え、北海道までは、以前と同様舞鶴まで走り、新日本海フェリーで小樽までということに落ち着いた。

「早く予約せんと」とパソコン検索に二階へ上がった夫は、「予約は一か月前からだったわ」と降りて報告に来るや、百均へと向かった。それからは、車に装備する細々した物を買ってきては、「これで荷物を置く所を作るけんな」などと、いちいち報告してくる日が続いた。

いよいよ旅行予定一か月前となつた日、「フェリーのチケット取るけんな」と言つて夫はコンビニへ向かった。ついに現実的になつてきた。仕方ない、頭を切り替えるとするか。

まずは大まかなコースを決めることにした。退職した年の七月の半ば、二台のバイクにまたがつての旅が一回目だった。ホテルやペンションを予約し、小樽から富良野方面、阿寒、網走、旭川、札幌と、北海道を横断。七月の北海道はまだ寒く、行きの狩勝峠も帰りの石北峠も、霧で見通しの悪い中、身を縮めながら走つた。二年目は、一回目の反省から八月下旬にし、宿泊場所は夜中にフェリーで到着する小樽だけを予約、あとは行く先々で決めることにした。というのは、一年目に予定を立てて行つたものの、出会うライダーに色々教えられ、変更しながらの旅になつたからだ。この年は、小樽から稚内までまっすぐから、そこからオホーツク海沿いを網走まで走り、羅臼を通つて釧路に出、日高の方を走り、羊蹄山を眺めてから余市へと、ほぼ北海道を一周する旅になつた。さて、今回はどういうコースにしようか。函館方面は行っていないので、そこは是非入れたい。余市のニッカウヰスキー蒸留所はまた行きたいし、層雲峡は霧の中だったので、今回は晴天の下で見た。ということとで計画を立てていった。

30代フリーター G A F Aなどの巨大 I T企業を規制するため、違反行為への「課徴金」を独禁法の場合の3倍にする新法案を政府が用意している、と朝日新聞が報じていた（4月16日朝刊）。

年金生活者 ネット上に生活や産業のインフラを築き、富の再分配までして人や企業に対する支配力を強めているアップルやグーグルが「もうひとつの国家」になることを許すまいとする国家の意志がうかがえる。

巨大 I T企業が築いた情報検索、通信、決済などのインフラは、それなしには個人の生活も企業の活動もほとんど成り立たないほどになっている。国家が直接または間接に整えた交通、通信、教育、医療、諸制度などのインフラの上に社会が成り立っているのと同じだ。

巨大 I T企業はネット上のインフラを個人や企業に提供する代わりに、その利用にともなうてあらわになる個人の行動特性などの情報を蓄積し、広告

年金 その危機を乗り越えるために、巨大 I T企業がとった方法が、過去の企業がとったのと同様の「独占」だ。違いは「独占」の範囲が広がっていないほど広く、ひとつの国家並みに達したことだ。ここまでの規模のインフラや再分配システムを築いた独占企業はかつてない。

G A F Aなどが国家並みの独占体になり得た大きな要因のひとつは、もっぱら情報を扱う企業であることだ。国家は「幻想的な共同性」（マルクス、エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』古在由重訳）であり、「共同幻想」（吉本隆明）の一形態にほかならない。そうした幻想、言い換えれば観念を有すればこそ、軍隊を組織し、インフラを建設し、富の再分配を担うことができた。情報もまた観念であり、その集積が国家を模倣することを可能にした。

30代 資本主義はこれからどこへ向かうのか。イノベーションが加速し、新旧

に活用して利益をあげている。そこには柄谷行人のいう交換様式 B II 服従と保護（略取と再分配）が成立している。インフラの利用者は巨大 I T企業による個人情報収集システムに「服従」する代わりに、無料でのサービスの提供という「保護」を受ける。

こうした巨大 I T企業の国家並みの振る舞い方に、既存の国家は「嫉妬」する。インフラの構築や富の再分配は国家が独占すべきものであり、一企業がすることではない、と。

30代 G A F Aなどがそこまで巨大化したのはなぜだ。  
年金 ポスト産業資本主義と呼ばれる現在の資本主義はイノベーションを利潤の主要な源泉としている。新しい技術やビジネスモデルを開発し、商品のコストを下げることで利潤を得ている。マルクスが特別剰余価値と呼んだその利潤は、新しい生産方法と古い生産方法との差異、抽象化した言い方をすれば時間的な差異から生まれる。

これに対し、最も古い形態の資本主

の生産方法の時間的な差が縮まり、それによって利潤の源泉が狭まり、それを埋め合わせる「独占」が広がり、膨張した巨大 I T企業の手足を縛るのに国家が躍起となる。そうした流れはポスト産業資本主義の終わりを示す兆候かもしれない。

これまで資本主義がたどった諸段階は、それぞれの段階に適合する政治体制を生み出してきた。生み出したとい

義である商業資本主義は、遠く離れたふたつの地域の間にある商品の価値体系の差異から利潤を得た。次の段階の資本主義である産業資本主義は、労働生産物の価値と、それを生み出す労働力の価値との差異から利潤を得た。いずれも空間的な差異が利潤の源泉となっており、時間的な差異から利潤を得るポスト産業資本主義との基本的な違いになっている。

I Tや A I の発達はイノベーションの頻度を増大させ、新しい生産方法と古い生産方法との時間的な差異を縮めつつある。このまま行けば差異はゼロに近づき、利潤の源泉にはなり得なくなる。輸送技術の発達は遠隔地間の距離を縮め、労働条件の改善は労働力と労働生産物の価格差を縮め、いずれも利潤を生み出す空間的な差異を小さくさせた。それと似た事態が現在では時間的な差異の縮小として起きていると考えることができる。

30代 いくらイノベーションに励んでも、もうからなくなる。

うの言い過ぎなら、支えてきた。商業資本主義は絶対王政を、産業資本主義は民主制を支えた。ポスト産業資本主義は民主制に加えて専制主義をも支えている。

もしポスト産業資本主義が終わり、次の段階の資本主義に移るとすれば、それは自らに適合した政治体制を求めるはずだ。それがどんなものになるかは今のところ見当がつかない。それでも強いて予測するならば、現在の民主制の拡張と専制主義からの脱却を新段階の資本主義は要求するだろう。

現在の資本主義は中国を見ればわかるように専制主義と手を携えている。だが、資本主義がさらに高度化し、表現の自由の抑圧が利潤の獲得を妨げるようになれば、両者は取り合った手を離さざるを得なくなるだろう。いま民衆の表現の自由を大幅に拡張した S N S が、G A F A を始めとする巨大 I T 企業の利潤の源泉になっていることを考えれば、そうなる可能性はあると言わなければならない。

ニュース日記 919  
中村 礼治

## 資本主義は新しい段階に入るのか